

文藝部

これの世の呪ひはしまし忘れつつ培ひにけむ白菊の花
 濃汁にまみれながらに三十年を闘ひ來ませる師は仰ぐべし(院長綱脇師)
 遠き世の不輕菩薩を仰ぐと師を圍みつつ人皆讃ふ

うみやまのほとり

岡村 正雄

春さらむぬくさと思ふ庭さきの牡丹の若芽雨にぬれつつ
 土の香の匂ひいとしき露の蓑帽子に摘みて歸り來たれり
 鷹取の峰の端わたる雲白く陽はうらうらと照りなごむなる
 月讀の光静けき夜となりて鷹取山にあをはづく鳴く
 何くれと思ふこと多しあをはづくしきりに鳴きて日の昏るるなり
 あへぎつつ登る山路はきはまりぬここにひっそり藤の花房

桑の葉に白き風吹く峽の道夏蠶の匂ひこもらへてをり

渚邊の白砂に咲く紫の小花は遂に知る人なしに (三保にて二首)

夕風で落日遙かにうつろへる駿河の海を吾が船歸る

みはるかす伊豆半島のおぼろみてこの夕暮を歸る船あり (田子ノ浦にて)

寝つかれぬ儘に歩めり蟲しぐれ聞きつつ吾れは月の下びを

みなぎらふ川面にさゆらぐほの明り唯だ一筋が月の下びに

ちきれ雲わたらふ丘の月夜みち蕎麥の花畑うちつけにしろし

かすかすの思ひ出こもる學報の出來榮見をれば涙こぼれ來(棲神發刊二首)

漸くに重任果し手にしたる本は仄かに匂ひたちくも

出家

さむざむと夕づく野みち行きつつに家督のことは話したりけり
 (吾は長男
 なれば弟に)

二二二

よし！吾人は死ぬまで學ぼう、闘はう、
 叩きに叩き、苦しみに苦しみ抜いて先づ自
 らの魂を育てよう、そして死ぬ迄に、たつ
 た一ツの汚点『人』てふ一字を白き永遠な
 る線上に印して行かう。

これが吾人の唯一の希望である。只希く
 は、人生に悔を遺さずに死んでゆける道が
 歩み度い。『予は予の任務を了せり』と微笑
 みつゝ逝ける様に。

蟬

上田 玄忠

窓越に見る樹々の若葉は、降り注ぐ様な
 眞夏の強い日光にきら／＼と輝いてゐる。

私は仰向になつてうと／＼として居たが、

林の中の蟬の鳴き聲がやかましくて眠れな

い、其の中に直ぐ前の木に蟬が飛んで來た

とみえて大きい聲で盛んに鳴き出した。ま

るで壊れた鈴でも振り立てるやうでやかま

しいと言つたらありはしない。

あの蟬は二十年間といふ長い／＼年月を
 土の中で暮すのださうである。その長い修

出家する吾子を送ると老いらくの母は涙を拭きたまひけり
老いの母の涙見まじとひたすらに門^{かど}へを吾^{われ}れは離^{はな}り來^きにけり

なにひとつ辛抱出來ぬと吾^{われ}が性^{さが}を責めたまふなり老いらくの父は
家を出てすでに七年みちのくの故山會津は思ほゆるかも

春雪はなほつもるらし竹折れの音時時に更くる靜か夜
若草にいねて懷へば幼な頃別れし友の臉に浮び來

身に餘る桑を背負ひし乙女子を穗麥の中に避けて通しぬ
麥熟れしだんだん畑の夕暮れをさやえんどうは紫に咲く

かねてより名のみ聞きぬし古文書を今はまさしく手に取り讀む（文庫蟲子）
この奥に瀧はありとふ溪小徑ひんやりと風は朽木の匂す

むづかしき佛書の講義きく窓に木犀の香の漂ひ來るも
時雨する野邊には人の影もなし畑におりて鴉は鳴くも

朝勤を終りて歸る廻廊ゆ遠き嶺には雪降れる見ゆ
いつしかによろこびおぼゆ朝朝のつめたき中を勤めはげみて

七面山行

熊谷利道

はじめとしめりかわかぬ松林に無縁の墓は古りてありけり
登りつきて暗闇のなかに鐘つけり鐘はさびしく谷にひびかふ

大土間のすすけしランブの灯の下に吾れは疲れて草鞋ぬぎたり（本社着）
山の夜のぬるき湯ぶねにひたりけり眼を閉ぢにつつひそけかりけり

溪底はさ霧にたちこめて見わかぬど深きに響く山川の鳴り

業をつんで此の世の中に出て來ると先づ殻を脱ぐ。それから柔な青みを帯びた羽を廣げて飛び出す。丁度よい木をみつめてそれにとまつて鳴き立てるのである。

暫くするとバーン／＼／＼と板木の音がした。私は釋迦堂の講習會に出席した久留島先生の話があつた。その内容は私が是れまで考へ及ばなかつた子供^{こども}の心理狀態に對する意味の話であつた。先生の話の中には次のやうなものもあつた。蟬が餘りにもよい聲で鳴くものだから子供達が、大きな袋を造つて可愛い蟬を捕り、糸で首をし

ばり、散々にいぢめたあげくには、羽をもぎ取り、頭をむしり無慘な殺し方をする。此れ等は皆原始時代の人がやつた事である。今でもさういふ性質が子供の心の中に残つてゐる。そのまゝにしておくならば、大人になつてからどんな人間になるか判らない。そこで宗教家が、子供達を教導して、この惡風を一時も早くなをさなければならぬといふ話しであつた。

私は先生の話が終ると廊下に出て欄干に凭れ乍ら前とは違つた氣持で蟬の聲にちつと耳を傾けた。